対面とオンラインの利点を生かし 1年生の進路選択の視野を広げる

茨城県立藤代高等学校

2020年度の1年生は、入学直後の全国一斉臨時休業から高校生活をスタートさせることになった。高校にとっても、休業期間中はもとより、登校再開後の初期指導は例年とは異なるものとなった。そこで、茨城県立藤代高等学校進路指導主事の吉田真弘先生に、同校の例年と2020年度、そして未だ先行き不透明なコロナ禍での今後の初期指導について、お話をうかがった。

吉田真弘 先生

休業中、ペースメーカーと定時の動画配信で生徒の学習リズム確立をサポート

茨城県立藤代高校では1年生の初期指導にあたって、これまで「中学生から高校生になる」「藤代高校への帰属意識を持つ」「志望校を決める」の3つを重視してきた。吉田先生は「『中学生から高校生になる』の主眼は学習習慣の確立です。本校の入学者は、中学時代は授業を受けるだけで内容を理解できたような生徒がほとんどですが、高校になると、予習復習をしなければ授業についていけなくなり、3年間の積み重ねが大切になります」と言う。そして「帰属意識の涵養」は、「藤代高校が自分の居場所であるという意識を持つことで安心して高校生活を送ることができる」との考えによるもので、「志望校の決定」は、「目的を決めることで何をどう勉強するかが決まり、日々の学習を頑張れるため」と話す。

休業期間中は学習面のサポートを優先して、問題集を配布し、学習支援システムを通じて毎日課題や小テストを配信した。また、毎朝決まった時間に起きて机に向かうリズムを作るために、その時間に取り組むべきことが示された「ペースメーカー」を提示した上で、定時に動画を配信した。「5～10分の短い動画ですが、例えば9時40分からは英語の動画を配信してその延長で1時間英語の学習をするように促し、10時50分からは数学の動画を配信するというようにしました」

登校再開後は、まず生徒と担任の信頼関係を構築するために、二者面談を実施した。学習の進度や定着が心配されたため、高校入試と休業中に自宅で受験した模試の結果を検証したところ、成績によらず英数国のいずれかに弱点を持つ生徒が多いことが分かった。そこで、成績に懸念のある生徒を、①3教科を平均すると点数は高いが、科目間の差が大きい生徒、②学習時間は確保できているのに結果が伴わない、学習の仕方に問題のある生徒、③学習時間は少ないが成績は良好な生徒、の3タイプに分け、タイプ別に3教科の教員が面談して、苦手科目の成績の1ランクアップを目標にアドバイスした。

登校再開後「全国国公立大学レポート発表会」で地方国公立大の情報を共有

進路指導の面では、地方を含めた全国の国公立大学に生徒の目を向けさせることに力を入れている。それは、同校が立地する取手市が東京に近く、同校では東京の私立大学への進学希望者が多い一方で、2016年度からの定員厳格化によって私立大学の入試が難化したためである。

2019年度の場合は、まず関東の国公立大学を対象に、5月に大学の教員を招き、生徒を対象とした国公立大学説明会を開催した。6月には「大学訪問」として、学問系統に分かれて関東の複数の国公立大学に赴き、夏休みにはオープンキャンパスへの参加を宿題とした。そして、生徒の目がなかなか向かない地方の国公立大学に関しては、5月に保護者に対し、鳥取大学から教員を招いて「地方国立大の魅力」というテーマで講演会を実施した。その講演会後、「地方にも世界的な研究をしている大学がある」「地方は下宿代が安く東京の私立大学に通うのと費用は変わらない」「卒業後は地元に帰って就職する学生が多い」といったことを「初めて知った」という感想があり、ぜひ生徒にも聞かせたいという声もあったため、9月に生徒を対象に同様の講演会を実施した。

しかし2020年度は入学式の翌日から休業となったため、上記のような進路関連の行事は中止となった。例年1年生の初めに行う「志望校決め」については、ホームルームの時間に、研究したいこと、好きなことは何かを考えさせるような取り組みを行った。そして、進路講演会と大学訪問の代替として、「全国国公立大学レポート発表会」を企画した。「生徒は国公立大学というと、地元の筑波大学や茨城大学、それに東京大学くらいしか思い浮かびません。そこで、全国の国公立大学を幅広く知ることと、大学の学問を知ることで進学に向けた学習意欲の向上につなげたいと考えました」（吉田先生）

実施方法は、まず夏休みに、全国の国公立大学を一人2大学ずつ調べる課題を出した。調べる大学は、1校はくじで選び(注)、もう1校は好きな大学を選ぶというように決めた。調べる項目は、①大学の外観やシンボルマークなど大学を象徴するもの、②アクセス、③設置されている学部学科、④その大学の面白そうなところ、の4つである＜資料＞。そして夏休み明けに発表会を実施した。

発表会では、まずペアで発表し合い、相手の大学の良いところを付箋に書いてお互いのワークシートに貼った。次にグループ内で発表し、そのグループの代表がクラス全体に発表した。さらに次の時間には、自分のレポートを机に置いたまま、他の教室をクラス単位で巡廻してレポートを見て回った。各自、各クラスのレポートから興味のある大学を選び、その理由を書き出した。生徒からは「知らない大学がたくさんあって驚いた」「いろいろな研究をしていることに興味がわいた」といった感想があったという。

＜資料＞全国国公立大学レポート

オンラインの活用では生徒の主体的な意識が必要 対面では生徒の実際の経験を大事にしたい

2020年度は以上のような取り組みをしたが、吉田先生は「大学に実際に足を運んだり、大学の教員から直接話を聞いたりするのとオンラインで視聴するのでは、生徒が受けるインパクトが違います」と指摘する。その一方で「コロナ対策で各大学が整備したオンラインでのオープンキャンパスやバーチャルツアーを活用すれば、実際に訪れるのが難しい遠方の大学に目を向けることにつながります」と前向きにも捉えている。「ただし、Webサイトや動画は受け身になりがちなメディアですから、主体的に情報を収集しようという意識をもたせる工夫が必要です」

2021年度については、「全国国公立大学レポート発表会」は、タブレットで動画を見せるなど、各生徒が調べたことを他の生徒が追体験できるようにすることなどを検討している。また、2020年度入試では地方国公立大学の説明会や講演会を行った結果、国公立大学の合格者が増加し効果を実感したことから、山形大学から教員を招いての進路講演会を開催する計画だという。

最後に生徒と教師が集う学校の意義について吉田先生に聞くと、「生徒の反応を見ながら授業ができること」だと言う。また、初期指導で重視している「帰属意識の涵養」については、「例年であれば入学者説明会の後、新入生は在校生に囲まれて部活動の勧誘でもみくちゃにされます。そういうときに、自分はこの学校の先輩から歓迎されているということや、高校生になったのだということを実感すると思います。2020年はそういう体験をさせてあげられなかったのが残念です。また、コロナ禍によって漠然とした不安を抱えている生徒が多く、今後も注意深く見守っていきたいと思います」と、気を引き締めている。

茨城県立藤代高等学校

◇**所在地**：茨城県取手市毛有640

◇**創立**：1973（昭和48）年

◇**学級編成**：全日制普通科各学年6クラス

◇**生徒数**：男子369名、女子349名（2020年5月1日現在）

◇**特色**：「地域に信頼され、地域から日本・世界へ、グローバルな視野を持てる人間を育成する学校づくり」を掲げ、30年以上にわたり、毎年20名の生徒をオーストラリアへ派遣している。大学進学に向けては、課外で重点的に学力向上に取り組む「EFFECTIVEクラス」の設置などにより、生徒の進路実現をサポートしている。

◇**卒業生の進路**：2020年3月卒業　235名
・進路：4年制大学164名、短期大学6名、専門学校41名、就職2名、その他22名
・合格者の内訳（現役生、延数）：国公立大学38名、私立大学292名

（注）くじは、まず、全国を北海道・東北、関東甲信越など6地域に分け、各クラス1地域ずつ割り振った上で作成した。